

原著

大学生における献血イメージの構成要素の特定ならびに 献血意図および献血経験との関係

井上颯*¹ 福岡欣治*²

要 約

現在、日本では特に若年者における献血量が減少している。本研究では、この問題に対する心理学的観点からの貢献可能性を示すため、献血に対して人々がもつイメージに着目し、大学生181名を分析対象とする質問紙調査を実施した。「献血に対する否定的なイメージは献血意図と負の関連をもち、肯定的なイメージは献血意図と正の関連をもち」（仮説1）、「献血の知識は献血に対する肯定的なイメージと正の関連をもち、また否定的なイメージに負の関連をもち」（仮説2）、「献血意図は献血経験と関連する」（仮説3）という3つの仮説が設定された。また、献血イメージや献血意図、献血経験に対して周囲の人の献血経験や献血行動への賛成等がどのように関連するかも探索的に検討した。献血イメージは肯定的イメージ1因子と否定的イメージ3因子が抽出され、相互に関連が見いだされた。共分散構造分析の結果、仮説1は支持され、仮説2と3は十分な支持が得られなかった。ただし、献血イメージに対して献血に対する親しい人の賛成が直接に、身近な人の献血経験も間接的に影響を及ぼすことが示された。これらの結果をふまえ、若年層の献血イメージや献血意図向上に向けた方策ならびに発展的検討の可能性が指摘された。

1. 緒言

1.1 はじめに——献血を巡る現状と課題

献血は健康な人による無償の血液供与であるが、現在、日本では特に若年者における献血量の減少が問題視されている¹⁾。2014年にはすでに、2013年の献血率のまま少子高齢化が進むと、2027年ごろには約85万人分の血液が不足すると予想されていた²⁾。2024年時点の指摘でも、近年の日本は少子化で献血可能人口が減少しており、将来的に血液を確保するためには若年層による献血行動がこれまで以上に重要であるとされている³⁾。

献血は身近な援助行動でありつつ、しかし現実には実行されにくい。前者に沿う情報として、献血は特殊な行動ではなく広く援助行動一般と強く関係しているとの指摘があり⁴⁾、社会心理学における援助行動研究でもその対象に含められてきた⁵⁾。荒川ら⁶⁾は大学生に「ボランティア」とみなす行為について

尋ねた結果、451人（63%）が献血を挙げており、全体の中で3番目に多い回答であったとしている。他方、後者に沿う情報として、援助行動の分類を行った高木⁷⁾は、献血を社会的規範よりも個人的規範に基づくとしており、これは社会的な望ましさの認知だけでは実行が難しいことを示唆する。また、高木⁷⁾によれば、この種の行動は自らの身体の一部を提供するだけでなく、努力、時間、不快感情等のコストも伴うとされている。

1.2 献血者の増加に向けた従来の取り組みとその限界

現在は献血参加者の増加による献血量の確保が大きな課題であり、そのための様々な取り組みが行われている⁸⁾。たとえば厚生労働省¹⁾によれば、献血推進のための政策として、中高生へのポスターやテキストの配布が行われており、また高等学校の「保健体育」では平成21年度から献血の制度について適

*1 元 川崎医療福祉大学 医療福祉学研究科 臨床心理学専攻（2024年度修了生）

*2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

（連絡先）福岡欣治 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp

宜触れることとされており、大学生に対してもポスター配布が行われている。

そのような取り組みは、若年期の献血経験が有用であるという知見から、その必要性が認識されている。たとえば高校生に対して献血意識の調査を行った竹下ら⁹⁾は、「高校生献血はその後の献血の動機づけになると思いますか」という質問に対し、「大変有効」「どちらかと言えば有効」と答えた人が合わせて69%であったことを報告している。また、奥村ら¹⁰⁾でも、複数回献血者になり得る要因を調べた結果として、「若年期での献血経験が合計献血回数に正の影響を与える」という仮説を支持する結果が得られており、若年期段階での初回献血はその後の献血行動を促進することが示唆されている。

しかし、現実には若年層の献血者数は大きく減少している。厚生労働省¹¹⁾によれば、2023年(令和5年)における16-39歳(16-19, 20-29, 30-39歳の合計)の献血者は計1,616,782人であり、これは2013年の約68.3%に過ぎない。そのため、献血者の増加という観点からみて功を奏しているとは言えない。

また、若年層に特化しない対策も実施されており、その他の対策も検討の余地はあるものの、効果的といえる対策は見つかっていないのが現状である。前者に関連するものとして、たとえば、「多回数献血者調査」として献血ルームでインタビュー調査を行った吉武¹²⁾は回答者の37.3%の人が周囲に受血者がいると報告しており、複数回献血の要因の一つとして「受血者の存在が想像できること」が想定されている。そして実際に啓発資料では受血者の声が紹介されているが、それらがどの程度一般の人に認識され、かつ有効なものになっているかは不透明である。後者に関連するものとして、謝礼(インセンティブ)が献血を増加させる可能性も指摘されており^{10,13)}、厚生労働省¹⁴⁾の調査でも、32.7%の献血者が「謝礼をもっとよくしてほしい」と回答している。井上と福岡¹⁵⁾の大学生を対象とした調査では、謝礼金額の上昇と共に献血参加意図も上昇しており、金銭的な謝礼によって献血参加意図が上昇することが示唆される。しかし、現状では2002年公布・施行の「安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律」により売血行為は禁止されている。そのため、少なくとも現時点では献血時の謝礼は容易に変更することができない。

1.3 献血に対する否定的なイメージとその改善可能性

本研究では、そのような現状に対して心理学的観点からの貢献可能性を示すため、献血に対して人々がもつイメージに着目する。なぜなら、未献血者は、

献血に対して否定的なイメージを持ち、それゆえに献血に対する関わりを避けている可能性があると考えられるからである。

この種のアプローチは日本ではこれまで組織的な形では行われていないようであるが、いくつかの散発的な先行研究がある。中でも若者の献血行動の要因分析を行った物部ら¹⁶⁾の研究では、献血に対するイメージとして「献血に対する痛みや恐れ」「献血への忌避傾向」「献血に対するイメージの悪さ」「時間の浪費感」「献血に対する危険なイメージ」で、未献血群が献血群に比べ有意に高い数値を示した。このうち、献血に対する恐怖や不安(針を刺すことに対する恐怖を含む)は、国内の報告¹⁴⁾のみならず海外の研究でも献血行動の障壁として繰り返し指摘されている変数であり¹⁷⁻²⁰⁾、従来より献血時に針を刺すことによる痛みや恐れないし身体的リスク等の否定的なイメージが献血参加を妨げるとされている^{14,16)}。

献血による痛みやリスクは献血という行為自体に含まれる否定的要素であるが、献血に対する否定的イメージにはそれに限定されない内容が含まれている。たとえば未献血者が初回献血者となり得る要因を調べた奥村ら¹⁰⁾では、献血の経験がない理由として、「血液が本当に役に立つのか疑っている」という項目の影響が有意であった。このような疑念は、後の分析で示される献血による損害意識といった否定的なイメージにつながり得るものであると考えられる。関連する指摘は、たとえば荒川ら⁶⁾にもみることができ、この研究ではボランティアの中でも行為の対象者が不明確なものとして献血の特徴が指摘されている。そして、荒川ら⁶⁾において献血と同様に対象者が不明確なボランティアであるとされている募金に関して寄付動機の構造を調べた中島²¹⁾では、寄付抑制動機の中に「寄付金の使い方が不明瞭だったから」や「身の回りの人(友人, 知人, 他人)が寄付をしていなかったから」等が挙げられており、その先行や活動の透明性の要望が報告されている。これらの情報は、献血に対する否定的なイメージをより多面的に検討すべきであることを示唆するものと考えられる。

ただし、このような不透明さを含む否定的なイメージは、献血に対する誤解あるいは知識不足にもとづいている可能性がある。たとえば日本赤十字社²²⁾は「血液のゆくえ」として、提供された血液の利用方法についてホームページ上で告知している。また、前述のとおり厚生労働省¹⁾は、中高生の若年層へのポスターやテキストの配布や、高等学校の「保健体育」で献血の制度について適宜触れることとし

ており、知識の提供を行っている。なお、物部ら¹⁶⁾で確認された「自身の体調不良」因子は「自身が貧血気味である」や「大量の血液を抜かれると貧血になりそう」等の項目で構成されているが、日本赤十字社²³⁾は「血液のゆくえ」と同様に献血の「献血の手順」として献血が可能な体調であることの確認する検査を実施していることの周知を行っている。そのため、献血に対する否定的なイメージは、献血に対する適切な知識の獲得によって改善される可能性が考えられる。

なお、物部ら¹⁶⁾では献血のイメージと献血回数に関連することを示しているが、献血意図（献血をしようと思う程度）との関連は扱われていない。また、奥村ら¹⁰⁾は岡山県の県民意識調査データをもとに献血イメージと献血意図の関連を報告しているが、元データの性質上、項目単位の分析に留まっている。海外のレビュー論文（例としてBednall et al.²⁴⁾）では献血行動に関してしばしばAjzen²⁵⁾の計画的行動理論が参照される。この理論において、「行動意図」はある行動を実行しようという意志に基づいた動機的要因として、態度の影響を受けつつ実際の行動を直接に規定する要因であるとされている。このことから、「献血意図」は献血行動と並んで着目に値する変数であると言える。

以上のことから、献血に対するイメージを多面的に測定し、未献血者の献血参加意図を上昇させる要因、およびイメージ諸側面間の関連性や、それらに対して献血の知識が及ぼす影響を検討することには一定の有用性があると考えられる。

1.4 本研究の目的

本研究では、大学生への質問紙調査により献血イメージを多面的に測定し、それらの相互関係を考慮しつつ献血意図および経験との関連を検討する。具体的には、「献血に対する否定的なイメージは献血意図と負の関連をもち、肯定的なイメージは献血意図と正の関連をもち」（仮説1）、「献血の知識は献血に対する肯定的なイメージと正の関連をもち、また否定的なイメージに負の関連をもち」（仮説2）、「献血意図は献血経験と関連する」（仮説3）という3つの仮説を検証する。また、献血イメージや献血意図、献血経験に対して「献血との接触経験」がどのように関連するかも探索的に検討する。献血率向上が望まれる若年層に含まれる大学生を対象にこれらを実証することで、介入の焦点を明確化し、献血促進に向けた対策の立案にも将来的な寄与が期待できると考えられる。

2. 方法

2.1 調査対象者

先行研究（眞壁ら⁸⁾等）ではしばしば若年者の低い献血経験率が報告されているため、本研究では相対的に献血への関心あるいは献血に関する情報に触れる機会が多いと考えられる医療福祉系X大学の学生を調査対象として設定した。X大学では献血支援を活動目的とする公認ボランティアサークルがあり、毎年複数回、献血車両が来訪している。実施の協力が得られた265名に対して質問紙調査を行い、232名分を回収した（回収率87.5%）。そのうち不同意であったものや記入不備を除く181名（男性48名、女性132名、その他1名；年齢 $M = 19.54$, $SD = 1.13$ ）のデータを分析対象とした。

2.2 測定内容

2.2.1 献血経験と献血に関する健康状態

回答者の過去の献血回数を数字で尋ねた。また、身体的理由により献血ができない回答者を弁別するため、「これまで、医師から献血することを止められた経験がありますか？」について「ない」「ある」の2件法で、「現在、あなたは身体的に、献血ができる状態ですか？」について「できる」「できない」「わからない」の3件法で尋ねた。

2.2.2 献血に対するイメージ

「回答者の持つ献血のイメージ」について、物部ら¹⁶⁾の抽出した因子を元に質問項目の文末を揃え、独自項目を加えた42項目を用いて尋ねた。7つの内容について各6項目からなり、肯定的イメージとしての「社会との互惠性」（「献血は人の善意に対するお返しである」「献血をすることは、社会へのお返しである」等）、「社会的規範」（「献血はよいことである」「献血は社会への奉仕であると思う」等）、「自身の健康情報の入手機会」（「献血は自分自身の健康診断になりそう」「献血は自分の血液成分を知ることができそう」等）、否定的イメージとしての「痛みや恐れ」（「針を刺されるのが怖い」「注射針を見るのが怖い」等）、「献血に対するイメージの悪さ」（「献血は血液を売っているみたいで嫌だ」「献血をするのは恥ずかしい」等）、「時間の浪費感」（「献血するのは面倒である」「献血をする時間があったくない」等）、「健康的被害感」（「大量の血液を抜かれると貧血になりそう」「献血をすると何かに感染しそう」等）で構成される（詳細は表1に記載）。選択肢は「1. まったくあてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. あてはまる」「5. 非常にあてはまる」の5件法とした。

2.2.3 献血意図

「献血をしたいと思う」等の6項目からなる（詳細

は後掲の表3参照). 献血に対するイメージに関する質問と混在させて尋ねた.

2.2.4 献血との接触経験

回答者の身近な献血者について、「0. いない」「1. いる (1人)」「2. いる (複数)」「3. たくさんいる」の4件法で選択させた. また, 親しい人における回答者の献血行動への賛否について, 家族と家族以外に分けてそれぞれ「1. 賛成と思う～7. 反対と思う」の7段階で回答を得た. さらに, 所属していた高等学校等における献血活動 (以下「高校での献血関連活動」) について, 「授業での説明」「講演会」「募金活動」「委員会等での課外活動」「献血バス来校」「その他」の計6項目を設け, 複数回答を求めた^{†2)}.

2.2.5 献血の知識

献血に関する知識を簡便に把握できる研究用の尺度は存在しないため, 献血に関する基礎知識を反映するものとして教員が児童生徒に伝える際のハンドブックである厚生労働省³⁾, ならびに日本赤十字社東海北陸ブロック血液センター²⁶⁾等を参考に「献血をするために必要な体重や年齢」等計10項目を独自に作成した (後掲表6参照). 各項目について回答は1つの正解を含む4つの選択肢を作成し, 1つを選択するように求めた.

2.2.6 個人属性

学年, 年齢, 性別 (「男性」「女性」「その他」の3つの中から選択) を尋ねた.

2.3 実施手続き

担当教員に許可を得た科目の開講教室において, 授業開始前または終了後に, 調査に関する説明書と調査票をセットにして配付し, 紙面および口頭での説明を行った. その際, 調査への協力は自由意思に基づいており, 回答しないことによる不利益は生じないこと, 結果は統計的に処理されるため個人が特定されないこと, 得られた調査票及びデータは厳重に扱われること, 調査への協力が得られない場合は

白紙のまま提出することができ, 回答を始めても途中で止めることができること等を文書及び口頭で説明した. 翌週の当該授業開始前 (または終了後) に, 各自で教室前方の出入り口付近に設置した提出用の箱にアンケートのみを投函する形で提出してもらった (協力の有無も個人情報とみなす観点から, 不同意の人にも同様に投函を依頼した). 以上の手続きを採用するにあたり, 授業担当教員と相談のうえ, 説明・配布・回収を通じて授業時間に影響が及ばないように配慮した.

3. 結果

3.1 回答者の献血経験および献血に関する健康状態

最初に, 本研究の回答者における献血経験回数を集計した (表1). 献血経験者は27名 (14.9%) であり, 複数回の献血経験がある人は8名 (4.4%) であった. なお, 大学生を対象に比較的大規模な調査を行っている眞壁ら⁸⁾ (医歯薬看護リハビリ系学科が中心ではあるが, 非医療系学科の学生が56.6%と過半数を占める) の結果 (表1右側) との比較としてフィッシャーの正確検定を行ったところ, 有意な関連は認められなかった ($p=.745$). なお, このことは献血経験の有無による2群および「経験なし, 1回のみ, 2回以上」の3群とした場合でも同様であった (それぞれ $p=.815$ と $p=.470$).

次に, 献血に関する健康状態に関して回答分布を確認した (表2). その結果, 医者による献血行動の制止に関しては約9割の回答者が制限を受けたことがなかった. 他方, 身体的に献血ができる状態であるか尋ねた際には, 約4割の回答者が献血可能な体調であると回答し, 約4割の回答者が「わからない」と回答していた.

3.2 献血イメージの因子構造

献血に対するイメージ測定のために用いた42項目

表1 献血回数の回答分布

献血回数	本研究		眞壁ら ⁸⁾	
	人数	%	人数	%
0回	154	85.1	754	85.9
1回	19	10.5	72	8.2
2回	3	1.7	22	2.5
3～5回	5	2.8	20	2.3
6～10回	0	0.0	7	0.8
11回以上	0	0.0	3	0.3
合計	181	100	878	100

表2 回答者の献血に関する健康状態

質問内容	選択肢	人数	%
医師から献血を止められた経験	ない	167	92.3
	ある	14	7.7
現在, 身体的に献血ができる状態か	できない	28	15.5
	できる	77	42.5
	わからない	76	42.0
合計		181	100.0

について最尤法による因子分析を行った^{†1)}。事前の想定にもとづき、因子数を7としてプロマックス回転を行ったが、8項目で想定と異なる構成の

因子に0.3以上または-0.3以下の因子負荷量が見られた。そのため、本研究のデータでの適切な因子数を設定する方針に切り替え、初期の固有値（7.883、

表3 献血に対するイメージの因子分析結果

項目内容	M	SD	F1	F2	F3	F4
F1 献血の意義 ($\alpha = .867$)	51.945	8.520				
献血をすることは、社会へのお返しである	3.680	1.094	.825	.229	-.087	-.002
献血は社会とのつながりである	3.790	0.989	.764	.111	.058	-.082
献血は人の善意に対するお返しである	3.300	1.116	.684	.212	.009	.005
献血をすることは健康の証である	3.760	1.035	.677	.047	.080	-.002
献血は輸血を受けることに対するお返しである	3.110	1.110	.607	.358	-.073	-.022
献血は社会への奉仕であると思う	4.144	0.790	.583	-.232	.096	.008
献血は人に対する援助になる	4.250	0.788	.577	-.295	.107	.103
献血は自身の健康状態を知ることに役立つ	3.670	1.038	.533	-.001	-.047	.016
献血は助け合いである	4.090	0.886	.533	-.123	.007	.168
献血は自分の血液成分を知ることができる	3.680	0.998	.480	-.191	-.140	.118
献血は自分自身の健康診断になる	3.330	1.111	.453	.049	-.094	-.086
献血は匿名の贈り物（ギフト）である	3.440	1.132	.417	-.077	.114	-.020
献血はするべきである	3.660	0.932	.401	-.087	.009	-.156
病気の人に血液を分けてもいいと思う	4.030	0.983	.344	-.283	-.090	-.103
F2 献血による損害意識 ($\alpha = .842$)	21.315	6.205				
献血をするのは恥ずかしい	1.560	0.845	.214	.690	-.036	.010
献血をすると何かに感染する	1.850	0.868	.199	.678	-.103	.074
献血をすることは人に言えない行為である	1.380	0.636	.024	.641	.025	-.121
献血をしている人は恥ずかしい	1.370	0.708	-.051	.625	.018	-.189
献血をすることで体の中から自分が損なわれたような気がする	1.810	0.949	.089	.609	-.030	.120
献血をすることによって健康が損なわれる	1.840	0.920	.002	.596	.034	.004
献血は必要以上に血液を取られる	2.280	1.065	.145	.572	.172	-.025
献血は血液を売っているみたいで嫌だ	1.710	0.855	-.091	.535	.103	.032
献血はよいことである	4.450	0.710	.232	-.500	.047	.056
自分の血液が人の役に立つ	4.280	0.708	.343	-.429	.083	-.039
献血をしても得がない	2.040	0.996	-.003	.393	.036	.356
献血は危険である	2.220	0.904	-.083	.348	.145	-.005
F3 痛みや恐れ ($\alpha = .879$)	17.663	6.457				
注射針を見るのが怖い	2.990	1.520	.014	.058	.942	-.110
針を刺されるのが怖い	3.200	1.525	.084	.118	.857	-.014
血液を見るのが怖い	2.610	1.511	-.051	-.082	.800	-.125
献血する行為が苦痛である	2.450	1.236	-.159	.071	.657	.119
血液採取時に嫌な経験をすることになる	2.670	1.247	.074	.167	.569	.124
献血は、痛みを伴う	3.740	1.067	.045	-.177	.531	.187
F4 時間の浪費感 ($\alpha = .714$)	17.995	4.183				
献血会場まで行くことが面倒である	3.350	1.232	.042	-.060	-.157	.673
献血するのは面倒である	2.860	1.170	-.123	-.057	.135	.645
献血をするより他のことに時間を使いたい	2.840	1.126	-.152	.073	.067	.553
献血をする時間をもったいない	2.130	1.030	-.072	.326	-.113	.505
献血は時間がかかる	3.564	1.045	.192	-.179	.082	.475
献血は待ち時間が長い	3.250	0.883	.056	.019	.045	.365
因子間相関			F1	-.424	-.002	-.065
			F2		.134	.216
			F3			.271

4.689, 3.214, 2.483, 1.902, 1.799, 1.511, 1.342, 1.178, 1.056……)と因子の解釈可能性を精査した。その結果として4因子とすることが妥当であると判断し、プロマックス回転後の因子構造をもとに因子負荷量が絶対値0.3以下になる4項目を除き、因子構造を確定した(表3)。肯定的なイメージを表す項目は第1因子にまとまり、第2・3・4因子は否定的なイメージを表すものであった。項目内容から、第1因子は「献血の意義」、第2・3・4因子は順に「献血による損害意識」「痛みや恐れ」「時間の浪費感」を表すものと解釈された^{†3)}。各因子を構成する項目(因子負荷量が負の場合は逆転処理)によるCronbachの α 係数は1~3因子が0.8超、第4因子も0.7超であり、いずれも許容範囲内であると判断した。

3.3 献血意図

作成した6項目が内的整合性を有することを確認するため、主成分分析を行った。その結果、いずれの項目も第1主成分の負荷量が0.700を上回っていた。また、十分な α 係数の高さが認められたため、全項目の合計点を算出することとした(表4)。

3.4 献血との接触経験

身近な献血者の多さについては「3.たくさんいる」という回答は2名(1.1%)とわずかであったが、他の3つの選択肢にはほぼ均等に回答が分布していた。親しい人における回答者の献血行動への賛否は、家族と家族以外の両方で賛成方向の回答が多く、かつ両者の間には高い相関($r = .695$)が認められた。

他方、高等学校等における献血活動については、最も経験率が高かった「献血について授業で説明があった」でも約25%にとどまっていた。

以後の分析においては、「身近な献血者の多さ」はそのまま扱い、家族と家族以外の賛否は得点が高いほど賛成であるように逆転させた上で合計して「献血に対する親しい人の賛成」とし、また「出身高校における献血活動」は活動の選択数を合計することとした(以上表5)。

3.5 献血の知識

各項目に対する回答分布を確認した(表6)。正答率は6割超(例:項目6)から1割未満(例:項目7)まで大きなばらつきがみられた。正答数の平均値は $M = 3.713$ ($SD = 1.562$)であり分布の偏りは認められなかったため、これを「知識量」として扱うこととした。ただし、各問題の正答を1、誤答を0とした主成分分析における第1主成分の負荷量は低く、探索的因子分析でも明確な因子構造は確認されなかった。

3.6 変数間の相関関係

本研究では、献血に対するイメージと献血意図、献血行動の関連、およびこれらに対する献血の知識や接触経験の影響を想定している。そこで、これらの変数間の相関関係を検討するため、ピアソンの積率相関係数を算出した(表7)。献血に対する知識および接触経験と献血イメージの関連に着目すると、献血に対する親しい人の賛成がイメージ4因子のす

表4 献血意図の主成分分析結果

項目内容	<i>M</i>	<i>SD</i>	F1
献血参加意図 ($\alpha = .883$)	19.260	5.692	
時間に余裕があれば献血をしようと思う	3.340	1.248	.844
献血をしたいと思う	3.240	1.240	.819
声を掛けられたら献血をしようと思う	2.830	1.157	.800
自身の血液型の輸血液が足りなければ献血をしてもよい	3.830	1.088	.791
献血バスを見かけたら参加しようと思う	2.620	1.097	.772
献血をすることが嫌ではない	3.400	1.319	.749

表5 献血との接触経験

指標	<i>M</i>	<i>SD</i>
身近な人の献血経験	1.020	0.846
献血に対する親しい人の賛成	12.116	2.491
高校での献血関連活動	0.757	0.898

べてと有意な相関（肯定的イメージは正、否定的イメージは負）を示した。他には、身近な人の献血経験と「献血による損害意識」との間に負の、献血の知識と「献血の意義」との間に正の有意な相関が認められた。献血イメージと献血意図、献血経験の相

関は、「献血の意義」と献血経験の間を除くすべての相関が有意（「献血の意義」と献血意図の相関は正、否定的イメージと献血意図、献血経験の相関はすべて負）であった。献血に対する知識および接触経験と献血意図、献血経験の相関は、主に献血意図につ

表6 献血の知識に関する項目と正答率

No	項目	正解の選択肢	正答率	他の選択肢
1)	男女ともに、400ml 献血をするのに必要な体重	50kg以上	54.5	40 kg以上 45 kg以上 55 kg以上
2)	男性の場合、献血をするのが可能な年齢の範囲	17歳～69歳	41.5	17歳～49歳 17歳～79歳 20歳～49歳
3)	1日あたりの献血者数（輸血のために血液を提供している人の数）	約 1万4000人	36.4	約7000人 約2万1000人 約2万8000人
4)	1日あたりの受血者数（輸血を受ける人の数）	約3000人	21.6	約1000人 約2000人 約4000人
5)	輸血用血液製剤（全血製剤）の使用期限（製剤後使用できる期間）	20日程度	27.8	40日程度 60日程度 80日程度
6)	献血のための注射針と、予防接種のための注射針では、どちらがより太いか	献血のほうが太い	62.5	注射のほうが太い 太さは同じ 決まっていない
7)	現在、より多くの献血が必要とされる（もっとも不足している）血液型	A型	6.8	B型 O型 AB型
8)	献血をすることで調べることのできる、血液に関する成分項目の数	14個	40.9	6個 10個 18個
9)	献血により得られた血液の、もっとも多い使い道	がん	26.7	事故 妊娠・分娩 研究
10)	献血に参加した場合の所要時間	約30分	50.0	約15分 約60分 約90分

表7 相関分析による変数間の関係

変数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
身近な人の献血経験	①									
献血に対する親しい人の賛成	②	.191 *								
高校での献血関連活動	③	.224 **	.109							
献血の知識	④	.210 **	.064	.081						
献血のイメージ										
「献血の意義」	⑤	.130 †	.281 ***	.104	.156 *					
「献血による損害意識」	⑥	-.184 *	-.418 ***	-.037	-.135 †	-.373 ***				
「痛みやおそれ」	⑦	-.064	-.311 ***	-.146 *	-.058	-.030	.204 **			
「時間の浪費感」	⑧	-.119	-.186 *	.029	-.073	-.095	.246 ***	.245 ***		
献血意図	⑨	.170 *	.465 ***	.184 *	.058	.377 ***	-.309 ***	-.531 ***	-.375 ***	
献血経験	⑩	.208 **	.114	.154 *	.088	.055	-.214 **	-.336 ***	-.215 **	.244 ***

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

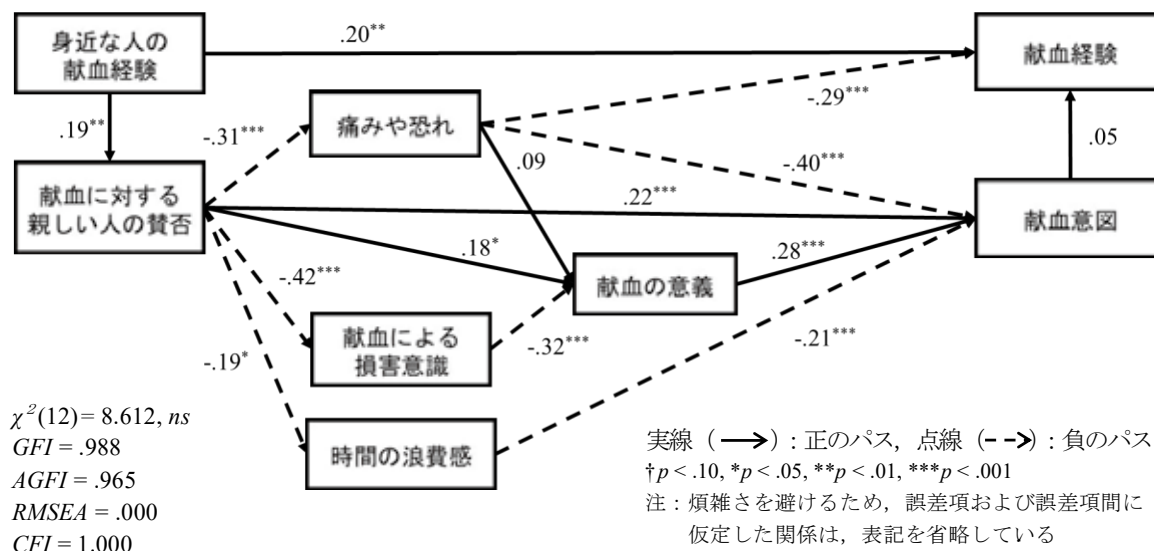


図1 共分散構造分析による変数間の関連性

いて認められ, 身近な人の献血経験と高校での献血関連活動は両者と有意な相関を示したが, より顕著であったのは身近な人の賛成と献血意図の正の相関であった。ただし献血の知識はいずれとも相関がみられなかった。最後に, 献血意図と献血経験の間にも有意な正の相関が確認された。

3.7 共分散構造分析による仮説モデルの検証

相関分析の結果をもとに変数間の関係をモデル化して共分散構造分析を行い, 適合度の高さをふまえて図1に示す結果を採用した。「身近な人の献血経験」は「献血経験」に直接正の影響を及ぼすとともに, 「献血に対する親しい人の賛否」と正の関連があった。そして, この「親しい人の賛否」は献血に対する負のイメージである「献血による損害意識」「痛みや恐れ」「時間の浪費感」に負の影響, 献血に対する正のイメージである「献血の意義」に正の影響を与えていた。他方, 献血に対する3つの負のイメージは直接あるいは「献血の意義」への負の影響を介して「献血意図」を低めていた。「献血意図」から「献血経験」の影響は正ではあるが弱く, 有意ではなかった。

4. 考察

本研究の目的は, 大学生への質問紙調査により献血イメージを多面的に測定し, それらの相互関係を考慮しつつ献血経験および献血意図との関連を検討するものであった。そして, 「献血に対する否定的なイメージは献血意図と負の関連をもち, 肯定的なイメージは献血意図と正の関連をもち」, 「献血の知識は献血に対する肯定的なイメージと正の関連をもち」, 「献血の知識は献血に対する否定的なイメージに負の関連をもち」であった。献血の知識は「献血の意義」と有意な正の相関, 「献血による損害意識」と10%水準での負の相関がみられた。ただしそれらの値は小さく, 共分散構造分析では献血の知識を削除することで適合度が上昇したため, モデルから削除された。以上のことから仮説2は支持されなかつ

ち, また否定的なイメージに負の関連をもち」, 「献血意図は献血経験と関連する」という3つの仮説を立てた。また, 献血イメージや献血意図, 献血経験に対して「献血との接触経験」がどのように関連するかも探索的に検討することとした。以下ではまず, それぞれの仮説ならびに探索的な検討に対する結果の解釈について述べる。その後, 本研究の結果をふまえて, 今後の若年献血者の確保に向けた課題と展望についても論及する。

4.1 仮説の検証

仮説1は「献血に対する否定的なイメージは献血意図と負の関連をもち, 肯定的なイメージは献血意図と正の関連をもち」であった。共分散構造分析の結果より, 否定的イメージの「痛みや恐れ」と「時間の浪費感」は献血意図に負の影響を与えていた。他方, 献血に対する肯定的イメージである「献血の意義」は献血意図に正の影響を与えていた。そして, 否定的イメージの「献血による損害意識」は献血意図を直接には左右していなかったが, 「献血の意義」に負の影響を与えることで献血意図へ間接的に負の影響を与えていた。以上のことから, 仮説1は概ね支持された。

仮説2は「献血の知識は献血に対する肯定的なイメージと正の関連をもち, また否定的なイメージに負の関連をもち」であった。献血の知識は「献血の意義」と有意な正の相関, 「献血による損害意識」と10%水準での負の相関がみられた。ただしそれらの値は小さく, 共分散構造分析では献血の知識を削除することで適合度が上昇したため, モデルから削除された。以上のことから仮説2は支持されなかつ

た。献血の知識は本研究で独自に作成した項目であったが、主成分分析での第1主成分の負荷量が低く、合成得点として十分に機能していなかった可能性がある。

仮説3は「献血意図は献血経験と関連する」であった。両変数は相関分析において有意な正の関連を示したが、共分散構造分析では有意な関連性が示されなかった。これは、献血意図と献血経験の関連が、モデルに含まれるその他の変数から両変数への影響によって説明され独自の関連性をもたなかったことを意味する。なお、本研究の「献血経験」は眞壁ら⁸⁾と同様の測定方法で把握されたものであり実際の献血行動を表すが、一時点での測定ゆえ必然的に過去の行動である。本研究の回答者の献血経験は全般に少なかったことも相まって、両者の関連性が検出しづらい状態にあったと考えられる。

4.2 その他の探索的分析に対する評価

本研究では、献血イメージや献血意図、経験と献血との接触経験の関係を探索的に検討するため、後者の指標として「身近な人の献血経験」「献血に対する親しい人の賛成」「高校での献血関連活動」の3つを設定した。分析の結果、献血イメージに対して「献血に対する親しい人の賛成」が直接に、「身近な人の献血経験」は「親しい人の賛成」を通じて間接的に影響を及ぼしていた。「親しい人の賛成」は、Ajzen²⁵⁾の計画的行動理論に当てはめた場合、態度の規定因の一つである「主観的規範」に近いと考えられる。また、「身近な人の献血経験」は、共分散構造分析において献血経験とも正の関連を独自に有しており、献血行動のモデルとして機能していると考えられる。

他方、「高校での献血関連活動」は「献血の知識」と同様に共分散構造分析ではモデルより削除された。「高校での献血関連活動」は平均値が低く、実際には保健体育の授業等において献血に関する情報提供が行われていた可能性もあるが、少なくとも本研究の回答者によっては認知されていたとは言いがたい。この原因について本研究の範囲内では明確な考察が難しいものの、少なくとも本研究の結果は、献血に関する情報への接触と適切な知識の獲得が、大学入学後に改めて行われるべきであることを示唆する。

4.3 本研究の結果をふまえた献血者増加に対する展望

4.3.1 周囲の人を巻き込んだ若年者の献血イメージの改善可能性

本研究の結果においては、献血の知識は献血イメージに影響していなかったが、「身近な人の献血

経験」や「献血に対する親しい人の賛成」は正の影響を及ぼし、結果として献血意図を高める方向に作用していた。そのため、否定的なイメージの低減には周囲の人が献血に対してどのような印象を抱いているかが重要であると考えられる。今後、否定的なイメージの低減を行い若年者層の献血率を高めるためには、周囲の人（家族や友人等）が幅広く献血に興味関心を持つように活動していく必要があると考える。

4.3.2 イメージ相互の関連性からみた献血意図向上の可能性

献血は社会的規範だけでなく個人的規範に影響される援助行動であり、身体器官の提供だけでなく、努力、時間、不快感情等の出費も伴う援助行動とされる⁷⁾。共分散構造分析の結果より、本研究でも同様に「献血による損害意識」や「時間の浪費感」が「献血の意義」を抑制し「献血意図」へ負の影響を与えていることが示された。そのため「献血意図」を向上させるために、「献血による損害意識」や「時間の浪費感」を改善することが有用であると考えられる。「献血による損害意識」には「献血をするのは恥ずかしい」や「献血をすることは人に言えない行為である」等の世間体を気にする項目が含まれる。そこで、献血広告や輸血情報等に接触する機会を多くすることで、献血活動に対する不透明感を軽減することが有効であると考えられる。また、「時間の浪費感」には、「献血会場まで行くことが面倒である」「献血をする時間がもったいない」等の項目が含まれる。そのため、例えば定期的な献血バスの稼働を宣伝ならびに増加・恒例化し、献血に対する概ねの所要時間を提示することでショッピングモール等での買い物に併せた献血をしやすくする等の方策が考えられる。

4.3.3 献血経験者の存在を意識させることの潜在的な有効性

現在、献血者数増加に向けて厚生労働省は様々な取り組みを行っており、例えば献血広報のパンフレットでは受血者の言葉が掲載されている。また、吉武¹²⁾も複数回献血者の要因として「受血者の存在が想像できること」を想定していた。しかし、現実には少なくとも若年層の献血者増加に寄与していない。

本研究では、受血者の存在ではなく周囲の献血経験者の存在を、献血意図と関連しうる変数として設定した。共分散構造分析の結果より、「献血に対する親しい人の賛成」は「献血に対する否定的なイメージ」に負の影響を与え、中でも「痛みや恐れ」「献血による損害意識」に大きな負の影響を示していた。

吉武¹²⁾は初回献血動機に関して、周囲の人々とりわけ家族や友人に献血者がいたことによる肯定的影響を示唆している。このことから、献血者数の増加のためには、受血者の存在を意識させること以上に、身近な献血経験者の存在を意識させることが有用であると考えられる。そのため、例えば献血経験者である著名人、特に若年層にとって年齢等の近い身近な著名人や、学校教育における献血経験を持つ教職員による広報活動を行うことが可能な方策として想定される。

4.4 本研究の限界と課題

まず、本研究の参加者における献血経験は先行研究(眞壁ら⁸⁾等)と同様に総じて少なく、献血イメージは実体験に裏付けられたものというよりも、基本的に想像にもとづくものであったと考えられる。これが経験によってどのように変化するかは本研究から直接に明らかにできるものではない。その意味で、今後の研究では献血経験についてより個人差の大きな年齢層も対象に含める必要があると考えられる。

また、本研究では先行研究^{8,16)}と同じく、過去の献血経験を回顧的に把握した。しかし、この方法では献血イメージの改善による将来の献血行動の変化を検証できない。また、献血意図が献血行動を導くという計画的行動理論に沿った変数間の関係にも対応していない。今後は少なくとも、特定の献血イメージをもつ人の、その後の献血関連行動(献血の実行、献血促進活動への関与等)を予測的に検討することが求められる。

現在、厚生労働省は献血推進に際して受血者の存在を周知することで献血参加を募っている。そのことに対し、献血経験者の存在を意識させることで献血意図を高めることができるのではないかと述べた。ただし本研究は受血者の存在と献血経験者の存在を直接に比較検討したものではない。そのため、今後の研究では両者をともに測定することで、その相対的な影響力の比較を行うことが有用であると考えられる。

なお、本研究で使用した「献血の知識」に関する指標は、厚生労働省³⁾等の公的情報にもとづいて作成した項目によるものではあったが、専門家の校閲や予備調査等の手続きを経たものではなく、その妥当性について直接の証拠を有していない。本研究では正答数の分布に偏りがみられなかったことを根拠にその後の分析に用いたが、主成分分析や探索的因子分析の結果(前者における第一主成分の負荷量の低さ、後者における不明瞭な因子構造)から、本研究における正答数を用いた分析結果はあくまで探索的なものに留まると解釈すべきであると考えられる。「献血の知識」におけるこのような問題は、仮説2の検証を実質的に困難なものにしており、本研究の大きな問題点であったと考えられる。

最後に、本研究の対象者は医療福祉系大学の学生であった。医療福祉系大学の学生は、一般の大学生に比べ献血に関する情報に触れる機会が多く、意識も高い可能性がある。本研究における参加者の献血経験率の低さは、仮にそのような特殊性があったとしても、それを超えて献血を実際には行ったことの少ない若年者に知見を一般化し得る可能性を高めるものとも解釈し得る。しかしながら、たとえば「意識が高いにもかかわらず、実際には献血を(一般的な大学生と同様に)あまり行っていない」ことが本研究の結果に影響している可能性は否定できない。その意味で、本研究の結果が医療福祉系大学の学生を対象としたものであることは、なおも留意しておく必要があると考えられる。そして、本研究の結果が大学生全般さらにはより広範な人々に一般化できるかどうかについては、今後の継続的な検討を待つ必要がある。

以上のようにいくつかの課題があるとはいえ、本研究は献血に対するイメージに着目することで、献血意図の向上をもたらす可能性を示した。献血イメージに関する研究は日本では物部ら¹⁶⁾を除きほとんどまとまった形での検討が行われていなかったと考えられ、今後の発展的検討の余地を大いに含むテーマであると考えられる。

倫理的配慮

本研究における調査の実施に先立ち、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得た(承認番号24-046)。

謝 辞

本研究の実施に先立ち尺度等使用のご許可をくださった先生方、研究の遂行に際してご支援とご助言をくださった先生方、そして調査に参加し回答してくださった学生の皆様に、改めて深謝申し上げます。なお、本研究は第一筆者が2024年度川崎医療福祉大学医療福祉学研究科臨床心理学専攻に提出した修士学位論文に加筆修正を施したものであり、その概要は岡山心理学会第72回大会(2024年11月開催)において発表されています。

注

- †1) 物部ら¹⁶⁾には因子抽出法の記載がなくバリマックス回転を適用している。本研究では最尤法・プロマックス回転を用いたが、その選択に際しては清水²⁷⁾、清水・荘島²⁸⁾等を参考にした。なお、最尤法においてサンプルサイズが小さい場合に懸念される不適解は、本研究のデータにおいて認められなかった。
- †2) いずれにも当てはまらない場合、「何もしていなかった」「覚えていない」「いずれにも当てはまらない」の選択肢からいずれか一つを選択してもらった（選択は順に52名、26名、1名であった）。
- †3) 因子の命名にあたっては物部ら¹⁶⁾を参考にした。

文 献

- 1) 厚生労働省：若年層に対する献血推進。
<https://www.mhlw.go.jp/content/11120000/001071267.pdf>, 2022. (2023.9.23確認)
- 2) 日本赤十字社：わが国における将来推計人口に基づく輸血用血液製剤の供給本数等と献血者数のシミュレーション(2014年試算)(解説資料)。
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/0000067176.pdf>, 2014. (2022.11.17確認)
- 3) 厚生労働省：教員用けんけつ HOPSTEPJUMP。
<https://www.mhlw.go.jp/content/11127000/001212916.pdf>, 2024. (2024.6.1確認)
- 4) 波多野梗子, 奥山幸子：女子大学生の援助行動—特に献血場面における—。民族衛生, 45(48), 139-145, 1979.
- 5) 箱井英寿, 高木修：援助規範意識の性別, 年代, および, 世代間の比較。社会心理学研究, 3(18), 39-47, 1987.
- 6) 荒川裕美子, 吉田浩子, 保住芳美：大学生の「ボランティア」に対する認識—医療福祉を学ぶ大学生を対象とした研究から—。川崎医療福祉学会誌, 18(1), 203-211, 2008.
- 7) 高木修：援助行動—その分類学的研究—。三隅二不二, 木下富雄編, 現代社会心理学の発展Ⅱ, ナカニシヤ出版, 京都, 123-151, 1991.
- 8) 眞壁美香, 大川聡子, 安本理抄, 根来佐由美, 上野昌江：大学生の献血意識を踏まえた啓発方法の検討—献血経験の有無に着目して—。日本地域看護学会誌, 22(18), 43-50, 2019.
- 9) 竹下明裕, 古牧宏啓, 浅井隆善, 梶原道子, 岩尾憲明, 室井一男：高校生の献血意識に関する調査。日本輸血細胞治療学会誌, 62(68), 711-717, 2016.
- 10) 奥村泰成, 柴田菜歩, 松下理子, 山口直樹：社会的インセンティブは献血意欲を増大させるか—献血行動に関する実証分析—。WEST 論文研究発表会2013年度論文集, https://www.west-univ.com/library/2013/13_best2_2.pdf, 2013. (2022.10.31確認)
- 11) 厚生労働省：年代別献血者数と献血量の推移。
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/iyakuhin/kenketsugo/genjyou.html, 2025. (2025.9.4確認)
- 12) 吉武由彩：匿名他者への贈与と想像力の社会学—献血をボランティア行為として読み解く—。ミネルヴァ書房, 東京, 2023.
- 13) 今井竜也：献血におけるサンクションとインセンティブ—血液政策・供血システム転換の可能性と必要性—。保健医療社会学論集, 17(1), 51-62, 2006.
- 14) 厚生労働省：若年層献血意識調査結果の概要。
<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000020ipe-att/2r98520000020j6a.pdf>, 2011. (2022.10.31確認)
- 15) 井上颯, 福岡欣治：大学生の献血意図と謝礼の種類・金額の関係—地域社会への責任感による影響を含めて—。岡山心理学会第70回発表論文集, 51-52, 2022.
- 16) 物部博文, 照屋寛英, 海老原修, 朝野聡：若者の献血行動の要因分析。教育医学, 52(2), 146-154, 2006.
- 17) Piersma TW, Bekkers R, Klinkenberg EF, De Kort WL and Merz EM: Individual, contextual and network characteristics of blood donors and non-donors: A systematic review of recent literature. *Blood Transfusion*, 15(5), 382-392, 2017.
- 18) Li Z, Lei S, Li X, Zhao Y, Dai Y, Jin S, Fu Q, Cai X, Lin Z and Tu X: Blood donation fear, perceived rewards, self-efficacy, and intention to return among whole blood donors in China: A social cognitive perspective. *Frontiers in Psychology*, 12, 683709, 2021, <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.683709>.
- 19) France CR, France JL, Ysidron DW, Martin CD, Duffy L, Kessler DA, Rebosa M, Rehmani S, Frye V and Shaz BH: Blood donation motivators and barriers reported by young, first-time whole blood donors: Examining the

- association of reported motivators and barriers with subsequent donation behavior and potential sex, race, and ethnic group differences. *Transfusion*, 62(12), 2539-2554, 2022.
- 20) Balaskas S, Koutroumani M and Rigou M : The mediating role of emotional arousal and donation anxiety on blood donation intentions: Expanding on the theory of planned behavior. *Behavioral Sciences*, 14(3), 242, 2024, <https://doi.org/10.3390/bs14030242>.
 - 21) 中島誠：寄付に関する動機の構造. 名古屋学院大学論集, 人文・自然科学篇, 56(1), 1-14, 2019,
 - 22) 日本赤十字社：血液のゆくえ.
<https://www.jrc.or.jp/donation/first/flow/>, 2022. (2024.12.1確認)
 - 23) 日本赤十字社：献血の手順.
<https://www.jrc.or.jp/donation/about/process/>, 2023. (2024.12.1確認)
 - 24) Bednall T, Bove, L and Murray A : A systematic review and meta-analysis of antecedents of blood donation behavior and intentions. *Social Science & Medicine*, 96, 86-94, 2013,
 - 25) Ajzen I : The Theory of Planned Behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 50(2), 179-211, 1991,
 - 26) 日本赤十字社東海北陸ブロック血液センター：献血は何歳からできるの？.
https://www.bs.jrc.or.jp/tkhr/bbc/special/m6_03_02_20160202-2.html, 2016. (2024.6.1確認)
 - 27) 清水裕士：因子分析の因子抽出方法について.
<https://norimune.net/705>, 2013. (2025.8.30確認)
 - 28) 清水裕士, 荘島宏二郎：社会心理学のための統計学—心理尺度の構成と分析—. 誠信書房, 東京, 2017.

(2025年11月14日受理)

Identifying Components of Japanese University Students' Image of Blood Donation and Their Relationship to Blood Donation Intentions and Experiences

Hayate INOUE and Yoshiharu FUKUOKA

(Accepted Nov. 14, 2025)

Key words : blood donation images, blood donation intentions, blood donation experiences, college students

Abstract

Currently, a decrease in blood donations among young people is becoming a problem in Japan. In this study, we focused on the image people have of blood donation and conducted a questionnaire survey with 181 university students as valid respondents. It was predicted that negative images of blood donation would be negatively associated with intention to donate, and positive images would be positively associated with intention to donate (Hypothesis 1), that knowledge of blood donation would be positively associated with positive images of blood donation and negatively associated with negative images (Hypothesis 2), and that intention to donate would be associated with blood donation experience (Hypothesis 3). As a result of the analysis, one positive image factor and three negative image factors were extracted from the image of blood donation. Covariance structure analysis supported Hypothesis 1, but did not provide sufficient support for Hypotheses 2 and 3. However, exploratory analysis showed that the blood donation experience and approval of blood donation by close others also influence the image of blood donation. Based on these results, possible measures and further considerations for improving the image of blood donation and intentions of young people to donate blood were pointed out.

Correspondence to : Yoshiharu FUKUOKA

Department of Clinical Psychology

Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.35, No.2, 2026 325 – 337)